



長倉三郎賞

橋本和仁 Kazuhito HASHIMOTO

長倉先生門下生の会 幹事, 国立研究開発法人物質・材料研究機構 理事長



日本化学会において令和3(2021)年度から新たに「長倉三郎賞」が設立されました。この賞は令和2(2020)年4月に逝去された日本化学会名誉会員・長倉三郎先生のご遺志により、ご遺族から「日本および世界の化学の発展と後進の化学者の育成」のために、日本化学会に贈られた多額のご寄付を基に設立されたものです。このたび、第1回の受賞者が選定されたことを機会として、改めて先生をご紹介します、本賞に込められた先生の思いを皆様にお伝えしたいと思います。

長倉先生は昭和18(1943)年に東京帝国大学理学部を卒業後、2年間軍務に就かれ、東京大学助手、同大学助教授を経て、昭和34(1959)年、同大学教授にご就任されました。昭和56(1981)年に定年退官後は分子科学研究所所長、岡崎国立共同研究機構(現・自然科学研究機構)機構長、総合研究大学院大学の初代学長、神奈川科学技術アカデミー(現・神奈川県立産業技術総合研究所)理事長を歴任され、さらに平成13(2001)年より平成19(2007)年までは日本学士院院長を務められました。

長倉先生のご研究は極めて広範にわたっていますが、最も代表的なものを挙げるとすれば、「分子の電荷移動に関する研究」といえるでしょう。ご自身も「Dr. 電荷移動」と呼ばれたと語っておられます。このご研究は「分子内電荷移動」、「分子間電荷移動」、「化学反応の電荷移動」と、3種に大別できると思います。いずれも極めて独創的なものであり、また化学において確立された最も重要な理論および実験法の1つとして、現在も化学にとどまらず多くの分野で用いられています。

長倉先生は多くの学術業績と、研究者としての多年の経験を背景に、我が国の学術振興および国際学術交流の面でも長年にわたり積極的に活動し、その推進に尽力されました。特に分子科学研究所の創設や、総合研究大学院大学の創設においては中心的な役割を果たされました。

また長倉先生は、研究者養成の面でも優れた指導力を発揮し、多岐に活躍する人材を育てられ、分子科学の基盤確立と、その発展に多大な寄与をされました。筆者は東大長倉研究室の最後の頃の学生でしたが、先生は研究に対し常に独創性を重要視され、また、最善の努力を要求されたことを強烈に覚えています。人の物まねをしたり、少しでも手を抜いたりすると激しい雷が落ちました。声はさほど大きくないのですが、その場にいたたまれなくなるような雰囲気立ち込めるのです。しかし、驚くほど門下生は皆、先生を心から尊敬していました。それは先生からは研究と教育に対する情熱がほとぼしっていたからだと思えます。常に背筋が伸び、凛とした古武士のようなお姿が脳裏に刻まれています。

長倉先生は最晩年まで新たな知見を吸収することを続けておられたようです。91歳のとき『「複眼的思考」ノススメ』という著書を出版なさっていますが、そこにはサイエンスだけでなく、人生そして社会全般に対する先生の考えが凝縮されています。また、亡くなる直前にも「自分はまだ社会のために何か役に立ちたい」とおっしゃっていたそうです。心から尊敬でき、そして真に師と思える先生でした。

学術と社会の発展に対する長倉三郎先生のご遺志が詰まったものが「長倉三郎賞」です。この賞が次世代の優れた化学者を育成し、化学と日本化学会のさらなる発展に大きく寄与することを祈念しております。

なお、『化学と工業』2021年4月号は長倉先生追悼特集号として発刊されています。

© 2022 The Chemical Society of Japan